

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年9月 第211号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

地方創生へと続く福祉の道を —多様性と柔軟性と創造性に満ちた加古川の街へ—

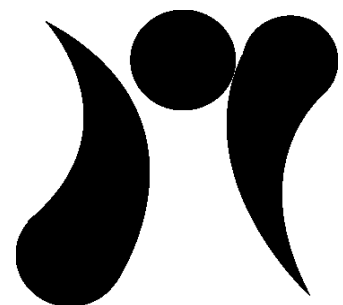
地球規模で温暖化が進む中、今までの『経験則』が役に立たない、大規模な自然災害が多発します。7月には西日本各地で『記録的大雨』による『豪雨災害』で川が氾濫し、山が崩れ、土砂が家を押し潰します。そんな様子をテレビで見ながら、改めて「災害の少ない加古川」に感謝しています。弥生時代の住居や集落の遺跡が多く残り、大和朝廷を中心とする古代国家成立の過程で重要な役割を果たした地です。日本武尊の生誕地とも云われ、日岡には景行天皇妃の御陵が祀られています。大和政権と九州・山陽・山陰とを結ぶ海路・陸路の要衝で、多くの人々が行き交った歴史を伝えます。時を経て徳川幕府の治世においても、加古川を挟んで「明石も姫路も」譜代大名が治めました。

緯度・経度共に日本の真中に近く、瀬戸内の海と白砂青松の砂浜、氷上地方から流れる加古川が運ぶ堆積土と緩やかな丘陵のいなみの台地に続く地形。程良い気候に恵まれた自然の中で、2千年程の歴史が続くこの加古川の街も今は何となく停滞気味で、神戸と姫路に挟まれた『特徴の無い街』と県行政も自嘲気味に宣伝します。スーパーやコンビニ・ファミレスが多くて暮らし易い街である事は確かであり、古代より時代は様々に変遷しても、その時代時代に応じた『暮らし易い環境』を適度に維持して来た様に思えます。暮らし易いが故に、『特徴的な地域性』が育たなかったのかも知れません。

日本では40年以上も続く少子化の中で、全国各地の自治体で社会機能の維持やインフラの整備・保全が困難に成る事が予測されています。

既に今でも消滅する集落が増えると共に、議会の維持が困難だと訴える自治体が現れています。『地方創生』と云われながらも「東京一極集中」と「地方の疲弊」が同時に、過剰に進行します。『ふるさと納税』と『ふるさと創生』を一体的に企画し実行する『叡智と覚悟と実践』が、強く地方に求められます。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

加古川の地では古来、人々が海と川の恵みを存分に利用して暮らし易い場所に集落を形成し、農業用水路や多くの溜池を造って新田開発を行い、穏やかな気候の豊かな農村地帯を創り上げました。『海の水・川の水・池の水』を母として育まれた地域で、全国有数の「溜池地帯」です。近年「海や川や池」が生活から遠ざかる中『水に親しむ暮らし』を取り戻す工夫が重要だと感じます。最近、加古川大堰を会場に「加古川レガッタ」が開かれます。ボートやカヌーは、自然と触れ合い自然との一体感を創り出す野外スポーツであり、世代を超えて全県・全国・全世界へとつながる可能性を秘めています。『水』に連なる『想像力と創造力』を傾けて企画を拡げ、掘り下げ、練り上げて、『加古川創生の街づくり』につなげて欲しい、と切に願います。

今の人口減少モードを前提に50年先～100年先の人口構成も概ね想定され、『生産年齢人口』の減少による重大な影響が出る事が予測されています。男女の雇用機会均等法や高齢者・障害者雇用法、働き方改革や外国人技能実習制度の拡大、等々様々な制度改正で働き手を増やす努力をしていますが、此れという決め手は見当たりません。その一方で今、刑を終えた受刑者の再犯率の増大が伝えられます。そして加古川には新・旧2つの刑務所が在り、併せて定員は2000人以上です。10年前に造られた『播磨社会復帰促進センター』は全国で4か所しかないPFI方式で運営する新型の刑務所であり、出所後に備えて『職業訓練』を積極的に行います。センター開設当初より数年間、ホームヘルパー資格取得の為の施設実習を当施設も受容れていました。最近、松山刑務所大井造船作業場（新来島どっく大西工場内）を脱走した受刑者が広島まで逃げる事件が起こり、住民の不安が広がっています。元受刑者の『雇用』に際しては、周囲の抱く不安がより大きくなると思われれます。

しかし一方で、刑期を終えた受刑者の再犯率が48%と高い中で、大井造船作業場を出所した受刑者の再犯率は「数%」と非常に低く、注目を集めています。人口減少の日本においては、『刑を終えた人の再生・再就職』は大きな可能性を秘めた施策であり、国も将来に備えて『PFI方式の新型刑務所』を創ったのだと思われれます。『働き手不足の日本』において『創生』の役割を担う『潜在能力』にも成り得ます。加古川市は2つの刑務所に2つの少年院と、矯正施設が4カ所揃う希少な街です。刑を終えた人の『人間再生の道』を探る方策が『加古川創生』につながる可能性を秘めている、とも考えられます。

有史以来、外国人の移民を正規には受入れて来なかった日本において、外国人技能実習生の労働力に期待する施策には、彼らの社会にも通じる『思想と社会性と幸福感』等が必要であり、其れは同時に、『受刑者の再生の道』を探る方策にも通じる『覚悟を伴う多様で柔軟な試み』を生み出さざるを得ないものだと思います。既に2千人を超える『人財』が暮らす加古川市においては、彼らの「潜在能力」を『顕在化』させる為の積極的な試みが『加古川創生』につながる『近道』にも思えます。加古川にしかならない、加古川独自の『人間再生』と『地方創生』の道を切り拓きたい、と心より願います。

要介護や認知症の老人を受容れ支え、障害児やダウン症の子を受容れ支えて来た『福祉の道』は、少子の世を支えると共に、受刑者の『再生』をも支える『創造力』を備えた『再生と創生の道』でもありたい、と切に願います。

Iさんの看取り

地域密着型特養 富田 智彦
(介護福祉士)

Iさんは平成22年1月11日に入所され8年間生活されてきました。

日中は食堂で過ごされていましたが、好んで浴衣を着て、他の利用者の方と話されていました。ほとんど介助は必要なくトイレへもご自分で行っていました。トイレから戻って来ると膝の上に、夜間はベッドの上にトイレットペーパーがありました。Iさんへ尋ねると「私の」「使うの」と話されました。しかし使うことはありませんでした。赤い物が好きで膝掛けなどがあると「これ私の」と言い手に持たれたり、取ってと言われたりしていました。他の利用者の物を持っていることもありましたが、名前を見てもらい説明すると怒ることなく渡してくれました。買い物外出に行くとき自分で品物を選び、次から次へと手に取り楽しそうに買い物をされていました。ご自分で立つことも出来ていましたが、時に車イスのブレーキの掛け忘れやバランスを崩して転倒しケガをすることもありました。少しずつ筋力が低下していきベッドへも上手く移ることが出来なくなり、介助が必要となりました。

平成29年12月頃より発熱が多くなりましたが、本人の希望がありベッドで休むことはありませんでした。声を掛けると「ええわ、起きとく」とよく言われました。今年の2月にインフルエンザにかかり少しずつレベル低下がみられだしました。食事を口に入れても嚙むだけで出してしまい、介助をしても全て食べることは少なくなっていきました。3月下旬頃からはほとんど食事をとることが出来なくなりましたが、食事の時間に居室へ行くと「食べるわ、起こして」と言われました。食べる意欲はありましたが身体が受けつけず、食事やお茶を口の中に入れても飲み込むことが出来ずに吐き出してしまいました。夜勤の時に水分の提供をしているとIさんはご自分に「しっかりしな」と言われ、誰にも迷惑をかけたくない、元気にならないと、と自身に言い聞かせているのかなと思いました。そして4月4日に息を引き取られました。亡くなる前日まで食事の時にはベッドから起きてみんなと一緒に食事をされていました。

Iさんは最期までご自分で起きることが出来ましたが、入居者の体調によっては「起こして」と言われても居室で過ごしてもらわないといけなかったことが多くあります。残り少なくなった時間をどのように過ごして頂くか、入居者の思いを考え最後まで思いに沿った介護が出来るように、あの時こうすればよかったと思うことがないようにやっていきたいと思います。



平成30年8月17日 アンサンブル4

キーボード、サクソフォン、エレクトリックギターの演奏で始まり、曲に合わせ口ずさむ参加者。懐メロ・カラオケになると声も大きく手拍子も段々と多くなり、残暑の厳しい暑さにも負けず笑顔で歌い楽しく盛り上がっていました。

(デイサービス 富永 千恵)



介護についてみんなで語ろう会【平成30年7月27日】

「本人の自立支援と環境づくり」について

地域密着型特養 西田 薫（介護福祉士）

衣笠 将弘（介護福祉士）



今回の介護についてみんなで語ろう会では「本人の自立支援と環境づくり」について地域密着型特養の事例を基に考え、発表しました。まず「自立支援」とはどのようなことなのか。言葉で理解はしていても説明は難しく、また世間一般では「特養＝寝たきり」という理解が多い中、今の特養で何が事例として「自立支援」に当てはまるのかと悩みました。そこで「自立支援」という言葉を「自立」と「支援」、二つの言葉に分けて考えることにしました。

「自立」は「自分ひとりが責任をもって行うこと」、「支援」は「意欲を引き出すためにサポートすること」と分けて考えていきました。すると普段介護職員として、お年寄りと関わっている生活の様々なことが「自立支援」になるのではないかと思いました。その考え方を基に改めて観察していると、あてはまる事例がたくさん出てきました。

「自立支援」に当てはまる事例としてまず思いついたのが、入居者のFさんという女性のことです。Fさんは若いころ、旅館で仲居として長年勤務されていたそうです。職員がしている雑用を「何か手伝うことはないか」「それ、してあげようか」と声をかけて下さいます。食事の時間では他のお年寄りが食べ終わった食事の皿を手早く一つにまとめたり、残飯を入れるバケツに残った食べ物を入れて食器を片づけたりして下さいます。しかしその中でも残飯バケツに食器や他のゴミを入れてしまったり、まだ食べ終わっていない方の食器を片づけてしまうなどの「間違い」もされます。そういう時はできないところを職員が代わって、Fさんにはできることをしてもらえるように支援します。残飯を先に職員で処理し、Fさんに食器をまとめてもらう、食べ終わっていない方の食器を片づけようとされたら、すでに食べ終わっている方の食器をまとめてもらうようお願いするなどしています。ここであてはまる「自立支援」は、「自立＝Fさんは食器をまとめ片づけること」「支援＝時々見守りながらできないことを手伝う」ことです。

このことをふまえ、語ろう会ではTさんという男性の方について発表しました。

Tさんは認知症により大きな声での独り言、急に怒鳴るなどの行動をされます。食事の時は、手づかみで食べられるため、手はべとべとでTさんの周りや服にはこぼした食べ物が散乱していることが日常になっていました。服を毎回着替えたり、手を拭こうとしても大きな声で怒鳴られたり時には手を振り上げられたりして、いつの間にか職員が付き添って食事を介助で食べてもらうようになりました。職員側の都合でTさんの「自分で食事をする」という力を奪っていました。しかし、ある日食事に使用するお箸をそのままにして、他のお年寄りの対応を行うためTさんから少し離れた時、Tさんはどうしているだろうと見ると、自分でお箸を手に持たれ、おかずを口にされていました。今まで手づかみで食べられていたのは何だったのか、またお箸を持つこと、正しく扱うことができるという事実と現状に、驚いたことを語ろう会で話しました。お年寄りの特徴・性格に合わせた介助を行っていますが、できないことがどんどん増えていくことが多いのが職員として当たり前だと思い込んでいました。Tさんは職員としての思い込みをある日簡単に覆してくださり、「自立＝自分でできること」を奪っていたことをTさんを見て感じ、気づかせてくれました。

次に私は、Uさんという女性の方について発表しました。Uさんは両耳が難聴、右目失明・左目視力低下という、ほとんど何も聞こえない・ほとんど何も見えていないという状態で日々の生活を送られています。Uさんは使われているお部屋と、お年寄り皆さんで集まって過ごされ

る食事の場所、看護師に目薬をしてもらうための医務室…と生活されている範囲は狭いですが、Uさんは相棒であるシルバーカーを押して、障害物にぶつかりながらも、いきいきと過ごされていることを「自立」として話しました。Uさんは食事の時間だと事前に職員から声をかけたり、食事をする場所まで案内しなくても、ご自身のタイミングで来られるのですが、食事時間ぴったりです。たまに時間を間違えられることもあるのですが、その時は場の雰囲気や空気を読み取っておられるのか、Uさんは「まだ時間じゃない」と判断され、Uさんのお部屋やいつも過ごされている場所まで帰られ、そして時間ぴったりにまた来られるのです。Uさんが唯一ご自身一人だけの力でできないことは、お風呂です。体を洗ったり、お風呂の浴槽をまたぐときに見守ることが「支援」です。Uさんの普段の生活の中で「自立＝好きな時間に好きなことをする」「支援＝一人では不安なことをサポートする」を「自立支援」として発表しました。

語ろう会に出席していただいた中に、男性お二人がおられました。

ご家族の介護経験があり、私達が発表したことを聞かれ、ご自身の経験談をお話くださいました。介護していく中での感じた葛藤や悲しい思い、つらく当たってしまったことを後悔していること、その中で介護している家族から「もうはよ死んだほうがアンタ楽になるやろ」と言われたことがあると話されました。その時は介護をしていて確かにしんどくつらいことが多いが、生涯付き添っていた中で介護を経験するのは当たり前だと構えていたこともあり「介護しているこの時間が生きがだからそういう悲しいことは言わないでくれと言った」とも話してくださいました。また「自立支援」というテーマと事例を聞き、施設で「自立支援を」と掲げていても本当にできているのか見えないところがあると思ったが、利用者にはいろんな特徴ある人がいること、そしてその人に合わせて援助を行っていることを感じる事ができた、見えないところが見えた気がする感想をいただきました。

最後にせいりょう園三周年記念文集の中に「自立支援」の項目の中から一文、紹介します。(渋谷 芳子『その人らしく』28頁 引用)

「命ある人が、責任のある自由な生活を送る権利を行使するのを援助すること」

この言葉を胸に、今後ともお年寄り一人一人のできることに改めて関心を持ち、自立している力を奪わないよう支援し、介護にしっかりと努めていきたいと思えます。



平成 30 年 8 月 22 日 グループホームまどか ～スイカ割り～

ご自身で歩ける方も車いすの方も、職員も一緒になってスイカ割りをしました。始めはスイカを食べることよりも割ることに一生懸命で、入居者の方も職員も割る様子を一行になつて見入っていました。それがスイカにヒビが入るのを見ると、今度は入居者の方々は食べることに意識が向き、「スイカが飛び散ったらもったいないから、それ以上割らんといて」と言われ、みんなの笑いを誘いました。その後はそれ以上スイカが飛び散る前に包丁で切って、みんなでおいしくいただきました。

入居者の方も職員も一緒に盛り上がって楽しんだ、夏の思い出の一つになりました。

(グループホームまどか 平山 昌代)





新学期を迎えた本日は9月とはいえ厳しい暑さです。4日には非常に強い台風21号が最接近すると新聞、テレビ等で警戒を呼び掛けています。空は青く、台風の気配が感じられず、暑さは増すばかりです。そんな中、爽やかにお越し頂いたのは、当施設の近くにありますが宣能寺のご住職岩本融乗様です。ご住職は緊張していらっしゃりながら『煩惱にまなこ冴へられて 撰取の光明みざれども大悲ものうきことなくて 如来はつねに我が身を照らしたもう なんまんだぶつ』と称えられ、ご講話が始まりました。

「親鸞聖人が書かれた『高僧和讃』の一首です。私達は煩惱があります。煩惱が自分を苦しめるのです。煩惱は108つあって、半分が自分中心の心、自分を中心にして物を考えてしまう、殻に籠ってしまう。皆の意見を聞いて、柔軟に考えられればいいんですが、自分の考えに凝り固まってしまう。もう半分が欲望と言われています。ある程度に収まればいいのですが、あれもこれもと欲が出てきりがないのです。ある92歳のおじいさんが、家族に看取られながら亡くられる時に、天井に手を挙げて『この家は渡さん』と言われました。欲望は皆持っています。それによって自分を苦しめてしまいます。煩惱に自分が振り回されてしまい、仏様が見守って下さっていても見る事も出来ず、聞こうともせず、感じる事も出来ない。そういう私達だからこそ救い取って下さるのが、阿弥陀様です。私も過去を思い出すと、よく助けられてきたと思います。辛くて仕方がない時に、お念仏を称えたり、亡くなった父の名を呼んだりしながら、不思議と助けられてきたように思います。それも仏様が見守って下さっていたからだと思えるんです。私達は人の世界にいます。人の世界は悲しみや苦しみを避ける事の出来ない、思い通りにいかない迷いの世界です。仏様の世界は悲しみや苦しみのない世界です。お浄土、極楽とも言い、苦しみや悲しみを超えてしまった安らかな世界です。私達は人の世界にいるけれど、ただ、ただ念仏し、人生を仏様と共に精一杯生き抜きなさいと親鸞聖人はおっしゃっています。」

ここから、今年の夏の厳しい暑さの話になりました。ご自身も7月に熱中症になられたそうです。スポーツをされていて知識もあり、何とか塩を舐めたり、冷やしたりして回復されたようです。今年は本当に辛い夏であった。辛い時、心地よい時もあった、思い通りにならないのが人生かな、この気候と同じかなと話されました。お話の続きです。

「皆さん、命日は何の日ですか？どういうイメージがありますか？亡くなった日が命日と言いますが、実は生まれ代わっていく日が命日です。仏様になっていく日が命日です。しかし、私達は今、人の命を生きねばなりません。この限りある人生ですので、少し命について考えてみたいと思います。最近テレビやニュースを聞いていても、嫌な気持ちになる事があります。もう人権やプライバシーなんてあったもんじゃないなど、思うんです。

お釈迦様がある王様に質問しました。『一番大切な物は何か？』王様は『王の位が大切です。』と答えます。お釈迦様は『本当ですか？』と聞かれます。『いややはり命が

大事です。』と答え、お妃様も『命が大事』と答えました。お釈迦様は『その通りです。人は皆、自分の命・大切な人の命を大切にして一生懸命生きています。だからこそ、決して他の命を傷つけてはなりません。』と言われました。大切な事だと思います。人は生まれた以上、嫌でも歳を取ります。いつかは必ず死を迎えます。そのような存在です。だから仏様の教えをしっかりと受け止めなくてはいけないと思います。」

続いて、ご自分の経験の中でのお話です。

「本願寺で1週間の研修の時です。前半は勉強、後半はテスト、最後の締め括りは法話のテストでした。13分～15分以内と決まっています。私の一番嫌な時間でした。私の3番目位前の50代後半の方の番でした。立派で貫禄があって余裕がある話しぶりに私の緊張感が増し、逃げたくなりました。中ごろで話がピタッと止まってしまう、落ち着きが無くなりました。こんな人でも緊張するのだと思い、自分の緊張が和らいたのを感じています。しんと静まり返ってしまった中で、一人の方が念仏を称えられました。テスト中にその声が皆に広がりました。全員が念仏をあげました。固まってしまった人が念仏の声に励まされ、声が出て時間通りに終わりました。がんばれという気持ちが念仏になったのか、その声に励まされて、その方も何とか無事に終わったのです。親鸞聖人は念仏の声は仏様からの声ですと教えられた。念仏の声が出るのは、何らかの働きがあるからこそ出るのです。自分が称える念仏であっても、周りから称える念仏であっても、その声は仏様からの声です。決して一人ではありません。悩みを持った私達にはなかなか気付かないけれど、仏様に包まれた中での人生だという事を喜びとして生きていくのです。と教えて下さったのが親鸞聖人だと思っています。ありがたい事だと思います。」と話され、高僧和讃をもう一度称えられて、ご講話が終わりました。

暑い中、皆様が揃われるのを待って頂き、優しく親鸞聖人のお話を聞かせて頂きました。ありがとうございました。

(サービス付き高齢者向け住宅相談員：岡村 照代)

【せいりょう園陶芸教室のご案内】

日 時：第1・2・3の日曜日と月曜日（10：00～13：00）

場 所：ユニット型特養横「アトリエ一番星」（加古川市野口町長砂 95-20）

月 謝：5,000円

土 代：1kg 1,300円（釉薬代・焼成費込み）

講 師：喜多千景・中本万理恵

申込先：せいりょう園 TEL (079) 421-7156



【せいりょう園空き情報 平成30年9月15日現在】

○サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：7室
(33㎡：3室 35㎡：2室 39㎡：1室 41㎡：1室)

○サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：7室
(19.1㎡：2室、24.7㎡：3室、25.8㎡：2室)

○グループホーム、グループホームまどか、ケアハウス：空きなし

[問合せ]せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433



RUN 伴 2018 について

今年もRUN伴の季節がやってきました。せいりょう園では2015年から参加し、今年で4回目になります。

2015年はランナーとして参加し、2回目の2016年からは加古川認知症の人と家族・サポーターの会と一緒に認知症カフェを開き、啓発活動を行う事になりました。



そもそも、RUN伴とは何なのか、どういった事を行っているのか。

RUN伴とは

「認知症の人の支援をするだけではなく、認知症の人と一緒に何か目標を達成したい」そうした思いから生まれ、認知症の方とそうでない方が一緒に絆をつなぎ、日本各地を縦断するイベントです。それぞれの地域で、今まで認知症の方と接点がなかった地域住民、認知症の方やその家族、医療や福祉関係者が、少しずつの距離を襁褓りしていきます。

認知症の方は、「何もわからなくなってしまう病気」、「怖い」といった負のイメージを持ってしまいがちな一般の方たちも、喜びや達成感を共有する事で、認知症の方が地域で伴に暮らす隣人である事を実感できます。

せいりょう園では今年も当日にカフェを開いてボランティアさん、学生さん、利用者さんが一緒に歌を歌い、走ってくるランナーを迎え、また新たなランナーを見送ります。また恒例となった焼き芋と一緒に頬張り、お茶を楽しみ、話に花を咲かせます。ぜひご参加ください！ランナーも募集中！

日 時：2018年10月13日（土）AM10：00頃～

場 所：せいりょう園ケアハウス前駐車場
（加古川市野口町長砂 95-20）

RUN伴主催者：NPO法人認知症フレンドシップ
RUN伴実行委員会（各都道府県）

参加施設、団体：ニッケつどい、ペーパームーン、ライフ加古川
（東播磨ブロック） あひの風、加古川市社会福祉協議会
グループホームにしむら
加古川認知症の人と家族・サポーターの会
兵庫大学ボランティアセンター、せいりょう園
（8/24 現在）

問 合 せ 先：せいりょう園 TEL (079) 421-7156